

『天工開物』の書誌学的研究 —三枝博音氏の研究継承の試み—

(報告者) 渡部 武

目 次

- I) はじめに—報告要旨—
- II) 宋応星の郷里
- III) 宋氏一族の系譜
- IV) 宋応星事跡年表
- V) 『天工開物』の書誌
- VI) 貝原益軒と『天工開物』
- VII) 明和本『天工開物』出版余話
- VIII) 陶涉園本『天工開物』
- IX) 尊経閣旧蔵楊素卿本の行方
- X) むすび—技術移転を考える—

『天工開物』の書誌学的研究—三枝博音氏の研究継承の試み—

渡部 武

《報告要旨》

明末から清初にかけての激動の時代を生きた宋応星は、中国の伝統的な生産技術を調べ上げ、一冊の大著『天工開物』（宋応星の友人徐紹燧の資金援助で崇禎十年〔1637〕刊行）にまとめたことで有名である。しかし、生前の彼の詳細な事跡については、人々によってほとんど知られていなかった。またその『天工開物』という書物自体、本国の中国においては忘れ去られたまま、20世紀初頭に至ってようやく光が当てられるようになった次第である。その再評価の契機をもたらしたのは、わが国の江戸期の明和八年（1771）、大坂の菅生堂から出版された翻刻本にあった。明和版は、以後しばしば版元を代えながら刊行を重ね、江戸の知識人などによって読み継がれていった。

中国では清初に民間の版元楊素卿が挿絵と本文の文字を若干変えて出版してみたが、やはり流通はごく限られていた。それは著者の反清的思想とも関係があるかもしれないし、あるいは軍事技術である火薬や兵器の製造などをも記しているのも、後代の『四庫全書』編纂のおりの収書規制が響いたのかもしれない。

明和本の刊行に至るまでの経緯は不明な点が多くある。その錯綜した糸のもつれを見事にほぐしていった先駆者は、三枝博音（さいぐさ・ひろと、1892-1963）であった。彼は科学技術史、思想史の研究者であるばかりでなく、自身がすぐれた哲学者でもあった。ことに終生の研究テーマとして、洋の東西にわたる技術の実際とその背後における人々の思想の比較に関心を払っていた。たとえば、一方でドイツの鉱山学者アグリコラ（1494-1555）の採鉱・冶金技術書『デ・レ・メタリカ』の精緻な翻訳を行なうかと思えば、他方で宋応星の『天工開物』の異本の文字校訂と「開物」思想の分析を明晰にやってのけた（三枝博音解説『天工開物』十一組出版部、1943年刊。本書は菅生堂本の覆刻とその解説で構成）。その複眼的研究手法は余人の追隨を全く許さぬ独創的なものであった。彼が注目してくれたおかげで、戦火で焼失する前の水戸彰考館所蔵楊素卿本の価値が明らかにされたのである。また巻末の解説では、ドイツ系のアメリカ人ルドルフ・ホンメル（"China at Work"）（旧中国の伝統的生産工具を写真多数で解説した優れた報告書、原著は1937年刊。近年、邦訳と中国語訳が刊行された）を援用しているのは、さすがと敬服の念を覚えた。

戦後になって、京都大学人文科学研究所の科学史研究班において、藪内清班長が『天工開物』の会談を実施し、研究報告書『天工開物の研究』（恒星社厚生閣、1953年刊。班員8名の論文と全文の訳注および原文で構成。訳文は後に平凡社の東洋文庫に修訂再録）を公開し、従来の『天工開物』の研究に一段落をもたらしたのである。

中国でも民国時代に、菅生堂本の翻刻や新たに挿絵を差し替えた翻刻がなされた。また

新中国になって、宋応星の人物像について飛躍的に研究が進化する新発見があった。それは中国の科技史研究者潘吉星（1931・、とくに製紙技術史研究の大家）自らが、宋応星の故郷奉新県において宋氏一族の家譜（『八修新興雅溪宋氏家譜』）を、また湖南師範学院図書館において宋応星の兄応昇の詩文集『方玉集』を、それぞれ探し当てたことである。文革が始まる三年前の1963年のことであった。もし文革後であれば、混乱の中で焚却されていたかもしれない。さらに江西の著名な蔵書家蔡敬襄（1877-1952）所蔵の宋応星の著作四種（『野議』『論氣』『談天』『思情詩』）が公表され、1976年に上海人民出版社から出版されたことである。

かくして、潘吉星はこれらの新発見資料を駆使して、宋応星についての詳細な伝記『宋応星評伝』（中国思想家評伝叢書、南京大学出版社、1990年、A5判、全681頁）を著わした。おかげで宋応星の履歴がかなり明らかになり、従来描かれてきた彼の人物像に対し大幅な修正を加える必要が生じてきた。とくに『野議』で述べられている宋応星の発言はきわめて政治的で、伝統技術を説く『天工開物』の筆者と同一とは思えないほどである。この著作を読み解くには、明末の政局における東林党や復社に所属する知識人の動向を熟知していなければならない（『野議』については、加計三千代の全訳がある。『岡山大学大学院文化科学研究科紀要』第30～33号、2010～2012年所収）。これは今後の大きな研究課題でもある。

ところで、話を『天工開物』の書誌についてもどしたい。この報告で私が述べたいのは、やや落徳拾いの的な瑣事にわたることであるが、それは『天工開物』がわが国にいつ将来されたかの問題である。大庭脩の労作『江戸時代における唐船持渡書の研究』（関西大学出版部、1967年）によると、「正徳二壬辰年〔1712〕 天工開物 一部一套」と記され、これが唐船で将来された唯一の明確な記録である。しかし、貝原益軒（1630-1714）は、それ以前の元禄七年（1696）に『花譜』を著述した際、「考用書目」の項に本書をリストアップしているのでもう少し以前に『天工開物』は将来されたはずである。しかし、益軒の参考書の引用の仕方にはいろいろ問題があり、その点について新しい資料によって別の将来年代を提示してみた。

それからもう一つの問題は、わが国には楊素卿本の鈔本が四種伝存していることである。その内の三種は、かつて私自身が調査してみたことがある。またその内の一種（東京大学図書館所蔵）を携えて中国国家図書館（旧称は北京図書館）を訪れ、そこでマイクロフィッシュ化された旧佐伯文庫所蔵楊素卿本と照合してみた。その結果、鈔本は筆写する人の几帳面さの度合いによって大きな差があることを如実に理解できた。そして痛感したのであるが、楊素卿本は坊本（町版）であるけれども、崇禎本とは異なる農具挿絵の差し替えがあり、翻刻する価値は十分にあると、私は確信している。この考えは人文研で『王禎農書』を会読した時の経験から発している。